



愛ランドまーい

地域がはぐくんだ、ふれあいのつながりを訪ねて

人と人のつながりがより身近な地域には、途切れることのない人の輪があり、脈々と継がれる絆があります。共同体意識に根ざした独特の活動を展開する各字を訪ねました。

「スナタムン」の集まり

スナタムン(スクチナムン)とは、島クトウバで、おどけて人を笑わせる者のこと。およそ四十年前のこと、この島クトウバにちなんだグループが誕生しました。

知念村(現南城市)字海野で、同じ年頃の子供をもつ五組の夫婦の日常のつきあいが発展して、相互扶助の活動に結びつきました。それぞれ親戚や隣近所に住む間柄で、仕事も海人(ウミンチュ)、農家、会社員、村議会議員、公務員とさまざま。

海水浴など、共に過ごすなか、当時、メンバーは毎年どこかの家で出産があったり、新入学児童を抱えたりで、物入りの連続でした。子育てのさなか、模合や積み立てをする余裕もない頃です。

そこで、お互いで教育費の捻出に考えたのが、五世帯共同のサトウキビ作り。畑を借り、オジイ、オバアから植え付けを習い、孫にわたる三世代総出でサトウキビの収穫に励みました。

収穫で得たお金は、共同で使うこととして新入学児童が出るごとに皆で相談し、順番に用立てていきました。

勉強机やランドセルの購入資金を得た以上に、子供たちが汗水流し、働く喜びを共に味わったのは予想以上の収穫でした。

現在、その子供たちは四十、五十代の年齢。それぞれに世帯を構え、四十年も続いた親たちのつながりを誇りに思う親たちの助け合いの精神を見本にして、私たちも仲良く付き合っています」と語っていた。



40年のつながりを子供たちに託して



子育て、労働、折々の楽しみ… 共同の心で暮らしを紡いで四十年。

南城市知念字海野のスナタグループ

昭和38年に誕生したグループ。親世代の地縁による結びつきから同世代の子供たちが仲良くなった。

名付け親は、海と野津 加佐原屋取

沖縄本島南部、中城湾に面し、馬蹄形にカーブを描く知念半島。その海岸線に沿って隣接する集落の二つに、海野があります。

海野は、元来隣りの知名集落の小字であった野津加佐原屋取に発祥し、明治四十二年(一九〇九年)に知名より他の屋取と共に、知名二区として行政上分離独立します。

海野という、まさにオーシャンビューをイメージする字名になったのは、戦争直後の昭和二十二年のこと。

その字名は、半農半漁のムラであり、糧とする海と野津加佐原屋取にちなんで名づけられました。

九十世帯、四百七十三名が暮らす当時の海辺の集落は、今日百六十六世帯、四百七十九名の人口になっています。

海野漁港からウミンチュたちが漁へ繰り出して、早朝からセリの活況を呈しています。

また、旧暦五月四日の海神祭には、海野のハーリーを目あてに、内外から多くに見物客が訪れます。

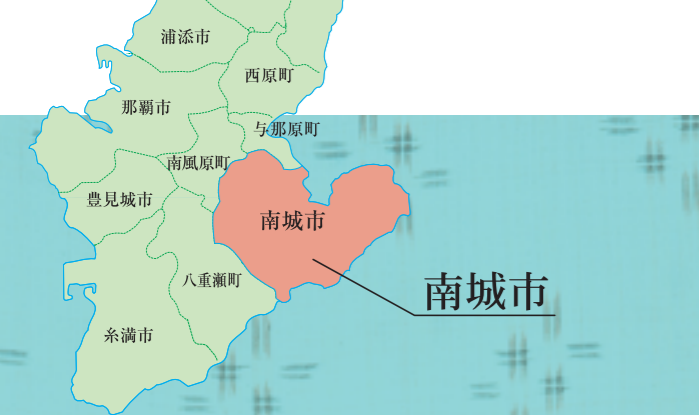
※都市にいた士族が農村に移住して形成した集落



空から見た海野集落



旧暦5月4日に行われるハーリー



南城市

東御廻い(アガリウマーイ)とは、古琉球の創世神(アマミキヨ)が天から降臨し、国造りをなしたといわれる玉城や知念の聖地を巡拝する行事。聖地は、首里の園比屋御嶽に始まり、東方(アガリカタ)と呼ばれた与那原・佐敷・知念・玉城に点在します。琉球王朝時代は、国王が最高神女聞得大君(キコエオオキミ)を伴い、旧暦二月と四月の麦初穂祭および稲初穂祭に久高島や知念・玉城を巡拝する祭祀行事が行なわれました。



斎場御嶽(セーファウタキ)
創世神アマミキヨの国造りにまつわる御嶽。沖縄最高の霊地で、聞得大君の即位儀礼が行なわれた聖地として敬われている。



久高島
十二年に一度、女性だけで行なわれるイザイホウの祭祀で知られる神の島。古来、王朝の祭祀場として知られる。



受水・走水(ウキンジュ・ハインジュ)
玉城字百名の南方にある清水湧き出る二つの霊泉。東御廻いの巡礼地の一つであった。向かって、右がウキンジュで琉球における稲作発祥地として伝えられる。

佐敷町・知念村・玉城村・大里村から南城市へ 古琉球の歴史ロマンと美しい風土

平成十八年一月、南部の四つの町村が合併して南城市が誕生しました。神の島久高や「東御廻い(アガリウマーイ)」の拝所巡礼で知られる御嶽、グスク、井など、琉球開びやくにまつわる史跡を擁し、歴史と神話の地として魅力を集めています。